

どん底の生活の先に見えた 人生の「宝」

佐世保教会 田村享子さん

昭和42年に結婚した田村さんは、夫の実家の食料品店を切り盛りしながら3人の息子に恵まれて平穏な日々を過ごしていた。その後、夫の考えて居酒屋を開業したが、白血病を患い突然他界。後には数千万円の借金が残った。身を粉にして働いたが、とうてい返済には追いつかず、友人、知人からも借り、さらには金融機関から借りるなど、借金地獄に陥ってしまう。田村さんのまわりには、話を聞き、慰めてくれる仲間がいたが、亡き夫への恨み、絶望感、孤独感に苛まれていた。そうしたなか、親身に尽力してくれる弁護士と出会い、借金の法的整理が進められた。生活が落ち着き始めると、仲間のあたたかさ気づき、頑な心が開かれていった。恨んでいた夫が、自分へ愛情を注いでくれていたことを思い出し、感謝の気持ちに変わった。「どん底を味わわなければ、人の痛みもわからず、人への感謝ももてなかった」と語る田村さんは、苦しかった日々を「宝」として生かせるよう、人生を歩んでいる。



信仰のこころ

私たちは、自分の思いどおりにならないことがあると、悩んだり嘆いたりして苦しみます。たとえば、夫婦の仲や嫁と姑の仲が悪いというのは、それぞれが相手に対して「こうしてほしい」と望み、それが思いどおりにならない状態なのではないでしょうか。つまり、悩みや苦しみの多くは、自分の内に原因があるのです。

ところが、そうした自己を中心にして人やものごとを思いどおりにしようとする意識を改めてみると、環境や条件は変わらないのに、それまでの悩みが嘘のように消え、逆に喜びの種になることさえあります。悩みを持たない動物や植物と同じく天地自然の一部分である私たちは、人間特有の我が欲や人を恨む心などから解放されれば、わだかまりがなくなり、ありのままを受け入れることができ、苦悩のない人生を歩むことができるのです。

このような意味の心の自由を追求し、人間としていかに生きるかを教え導くのが宗教で、それを実践していくのが信仰ではないでしょうか。

立正佼成会